

# がん治療の今

■■■ 2

## 薬物療法が進歩

がんの標準的治療は手術と薬物、放射線療法があるが、患者の状態に、がんの種類や進行度などを考慮して、単独や組み合わせて治療を行う。

最も基本とされるのは、がんを取り除く手術療法（外科治療）。国内の手術技術や成績は国際的にもトップレベル。大腸がんは、米国より圧倒的に良好な手術成績が得られている。西胆振管内では、五大がん（胃、大腸、肝臓、肺、乳房）の手術だけでも、年間約7

00件を数え、ほぼ管内の医療圏で完結されている現状だ。

抗がん剤などを用いる薬物療法（化学療法）は、急速に進歩している。完治を目指す場合や延命の

れている。

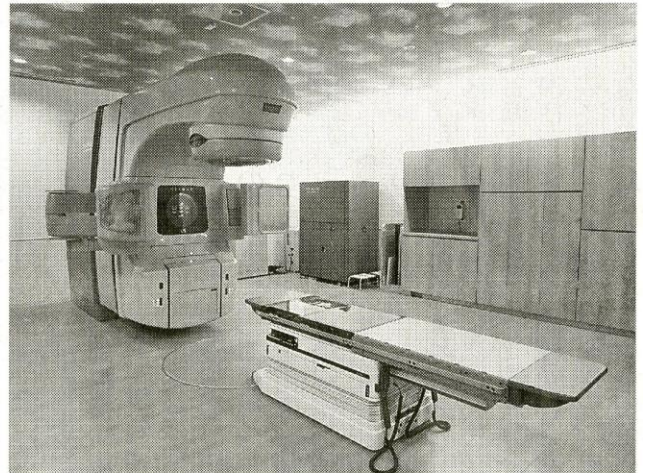
国内では少し前まで、新薬承認に長期間を要し、待っている患者にかなかな届かない問題（ドラッグ・ラグ）もあったが、現在はかなりの解消されつつある。

## 国内、西胆振の現状②

# 腫瘍内科医 少なさ課題

ほか、がんを切除できる大きさに縮小するために手術前に使ったり、再発・転移予防目的の手術後併用など、幅広く実施さ

（個別化）治療も急速に発展している。さらに、抗がん剤だけでなく、副作用を抑える新薬もあり、入院から通



放射線治療装置（リニアック）。製鉄記念室蘭病院でも3月から稼働（臨床稼働）する

国内レベルは世界から大きく遅れていると言わざるを得ない。

がん患者のうち、併用を含む放射線治療を受けている人は、欧米では約60%に対して国内は約30%。国内でも都道府県別で約2倍の開きもあるなど、大きなばらつきが存在する。

2016年度（平成28年度）までの「国の『がん対策推進基本計画』」で、重点的に取り組むべき課題に「放射線療法の推進」がトップ項目となっている。

西胆振管内をみると、これまで日鋼記念病院と市立室蘭総合病院で、数多くの放射線治療が実施されるなど、大変充実した治療体制があった。

今後も放射線治療の必要性が高まる中、蘭東や登別地域の患者ニーズに

応えるため、製鉄記念病院でも、3月から新たに放射線治療を開始する。西胆振管内の「がん治療レベルを全体的に、さらに向上させる一助になる」と思っている。



まえだ・まさひろ 1985年（昭和60年）札幌医大卒。医学博士。札幌医大臨床准教授。内科学会認定総合内科専門医。消化器病学会専門医・指導医。がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医。56歳。

## 放射線必要増す

一方、今、最も期待されているのは放射線治療だ。低侵襲で身体に優しく、臓器の形態や機能を

院治療へとシフトされつつある。ただ、国内では、化学療法に高い専門性を持つ腫瘍内科医が米国に比べて極端に少ない。西胆振管内も同様で、今後の課題である。

温存できる長所がある。食道、肺、前立腺、乳、子宮の各がんなどで治療を目指す時や、骨転移や脳転移などの痛みの緩和、進行がんの症状の緩和にも効果的だ。

高齢化が進む国内の現状に、クオリティオブライフの観点からも、放射線治療の必要性は増している。まさに時代の要求するがん治療だが、

## 製鉄記念室蘭病院・前田征洋副院長